

熊本女子大学学報

No. 4 昭和46年4月1日(木)

発行所 熊本女子大学
 熊本市大江二丁目七番一号
 TEL 66-2201
 編集発行人 熊本女子大学学報委員会

花の命

学長 村中末吉

花は美しいがその命は短い。命が短いから花は美しいと思うのである。造花の命は長い。しかし、造花は生花の美しさには及ばない。造花の美しさは、いつかは飽きられて、美しいと思われなくなってしもう減びいくものは美しい。生物の命にはすべてその限界がある。限りがあるが故に生命は尊いのである。

何故に生命は尊いのであろうか。美しく咲き匂う花は、動物に美しく思わせ、またその香によって動物をひきよせ、動物によって花粉の交配をさせ、その結果として実を結ばしめるのである。実は新しい命の種である。その実を作るために、花は咲き、新しい命の種のために、花は短かく、はかなく散ってしまう。

人間は自分の生活の充実を求めて、この世に生きる意義を見出すのである。しかし、人間もやはり子孫である種族の保存のために死ななければならない。人間も生物である以上、生物共通の真理から除外されることはできない。しかし、人間には他の生物と異なるものがある。人間には理性と自由意志が与えられている。したがって、理性と自由意志を与えられている人間は、責任をもって自分を進歩発展させることができるように努めなければならない。ここに教育の使命がうまれてくる。

大学とは真理の探求と人類の進歩に捧げられた共同社会である。その構成員は、各々が人格の尊厳と基本的な人権を認めあい、真の自由と深い人間関係をもつことのできる共同社会の一員でなければならない。

大学とはあらゆる面で、あらゆる可能性を抱いている開かれた場である。そして学問する唯一の高遠な目的は、よりよい人間になりたいという希望である。

大学は学生が真に人間的な自由と兄弟愛を経験しうる種々の共同社会をつくることに深い関心を示し、またそのために努力するものである。そして、知性はこのような共同社会をつくる機能であると同時に最も個人的な諸経験を通して理解しあう鍵となるものであ

る。

大学の使命は、短い大学生活の間に学生たちに真の共同生活を営む経験をもたせる場をつくることにある。これは個人、個人にとって、生涯の力となり、骨となるものである。また将来予測できない大小の困難に直面したときの判断の基準を与えるものである。そして、生涯を通じて、大学時代に得た「人間とは何か」という問の答えの探求をつづけていって、いつかはその答えを確保することができるようになることである。大学の存在は、そのように人間の根源的な問に深いかかわりを持ち、それに応答する道を具体的に用意するものでなければならないと思う。

大学は春の四月とともに、若い力にあふれた新入生の諸子を迎えて、新しい学年の歩みを始めようとしている。新入生の諸子が大学の使命を理解されて、四年間の大学生活が実り多い意義あるものとなるように努力されることを心から希望するものである。

国文学科紹介

国文学科を志望し、見事入学された皆さん方に、まずは心からお喜び申し上げます。

国文学科についての紹介は、教務課その他からもあることと思いますが、この紙上を借りて若干紹介することに致しましょう。

まず、先生方の紹介から始めます。国文学科に所属する先生方は、教授4名。助教授2名。助手1名で、別に外来講師として4名、次のような方々です。

山本捨三教授 — 近代文学担当。特に「詩」文学。学部長。京都大学出身。

本田義彦教授 — 上代・中古文学担当。主として、万葉集。勅撰和歌集・源氏物語など。学科主任。京都大学出身。

古沢末知男教授 — 中国文学担当。主として、中国文学と国文学との比較研究。4年補導委員。東京文理大学出身。文学博士。

迫徹朗教授 — 中古・中世文学担当。主として、枕草子・平家物語など、随筆・日記・歴史物語方面。

1年補導委員。東京大学出身。
 神部宏泰助教授 — 国語学担当。主として方言学。学生部委員・3年補導委員・広島大学出身。
 一瀬幸子助教授 — 近世文学担当。主として、近松・芭蕉文学。2年補導委員。本学同窓会会長。本学第1回卒。中央大学大学院出身。
 枝元みそら助手 — 国文科の一般事務担当。本学第一回卒。

× × ×

齋藤勝次講師 — 書道担当。熊本大学教育学部教授。
 秋山正次講師 — 国語科教育担当。熊本大学教育学部助教授。
 田上正立講師 — 文章表現・音声言語担当。熊本大学教育学部助教授。
 池上洵一講師 — 説話文学担当。熊本大学法文学部助教授。

————◇————

次に、国文学科には「国文談話会」と称して、学生を中心とする研究と親睦の集りがあります。何れ委員の学生から説明があることでしょうが、春には新入生歓迎の意味を含めて近接地の文学散歩、秋にはバスを利用しての1泊旅行で、近県各地の文学遺跡巡りが実施されます。さらに、年1回「国文学研究」という雑誌が発行されます。これは学生諸君のための発表機関ですから、大いに投稿を歓迎します。なお、各研究会も、それぞれに設けられていますが、新入生諸君の加入を歓迎すると共に、活発な活動を、大いに期待しています。(文責 本田義彦)

英文学科だより

○教官の紹介、特に新入生諸君のために、英文学科所属の教官を紹介する。

阿波保喬教授、英文学担当、主にG・ニリオットを中心とする19世紀英文学専攻、学生部長、九州大学出身

井芹龍成教授、米文学担当、主たる研究はスタインベック、学科主任、4年生補導委員、九州大学出身、

平戸喜文教授、英文学担当、主にゴールズワージーを中心とする20世紀英文学専攻 3年生補導委員 大阪大学大学院出身

伊牟田忠敏助教授 英語学・英語科教育法担当 音声学・構造言語学専攻 東京教育大学大学院出身

富田党夫助教授 英語学担当 古代中世英語専攻 3年生補導委員 九州大学大学院出身

重松隆矣講師 英文学担当 主たる研究はミルトン

1年生補導委員 九州大学大学院出身
 杉本俱子助手 英文学科全般に関する事務を担当
 英文タイプの指導 本学第18回生

なお、英文学科では、英文学、米文学・英語学の各専門教科と並行して、プラクティカルな面として、英作文・外人講師による英会話が毎学年開講され、また時事英語研究・英語科教育法、更に英文タイプの講習も実施されている。

○学会の開催 今年度の日本英文学会第24回九州支部大会が本学で開催されることに就いては、既報の通りであるが、時期は例年より大幅に繰り上げられて、6月5(土)6(日)の両日に決定した。英文学・米文学・英語学の各分野に亘って、第1日は個人の研究発表、第2日は部門別のシンポジウムがもたれ、終了後、懇親昼食会・特別講演が行なわれる。

巨大なコンクリートの学館が林立し、豪華な図書館を誇る大学が数を増している時、施設の不備、狭小な面は多々あろうが、クラシック(?)な本学の教室で繰りひろげられるのにも、それなりの意義はあろう。大会開催を2カ月後に控えた今、シンポジウムに司会者として参加する井芹教授を中心に、阿波教授以下、学科を挙げてその盛会を期し、鋭意準備中である。

もとより大会の成功は、独り英文学科関係者の熱意と努力だけでは不足である。皆さんの暖かい御支援と御協力をお願いする次第です。(46.3.9 平戸記)

家政学科の紹介

家政学といえば、衣・食・住・保健・家族関係などを柱として、その名の如く、生活の為に必要な、学べき多くのことがらを内包した学問であるが、いったんのぞいて見れば、殆んどあらゆる分野の学問によって支えられているといっても過言ではない。それだけに時間割を見てもわかる通り誠に盛沢山の教科目が組み込まれている。

特に新入生の皆さんは、何を選択履修すべきか迷うことがあると思うが、出来れば早い時期に自分が学んでゆく方向を決められた方がよいと思う。

いったん焦点が決まれば、それに関連した教科目の履修は勿論のこと、自主的に広く読書することが望ましい。

又家政学は生活に密着した学問であるだけに、時代の変遷に伴って敏感に変化してゆくのも当然である。したがって常に新しい知識の導入に心がけなければならないが、その反面、生活の歴史を学ぶことも誠に大切で

ある。
 このように書いてみればえらく忙しい学問のようになってしまいが、なにも皆さんを驚かそうというのではない。要は、将来自分が学んでゆく方向と、研究態度を身につけて欲しいのである。

最後に一言、
 家政学科で学ぶ皆さんは、将来にそなえて、色々の意味に於いての「生活の智慧」をしぼり出す習慣を身につけて欲しいと思う。母親の一寸した「生活の智慧」こそ偉大な子孫の出現につながるのである。

新入生の皆さんへ

食物学科

食物学科は、食品と栄養の科学的知識を教育するところです。従って自然科学的の学科が中心となりますが、社会的関連性も強いのですから、社会的学科も修め視野を広くする必要があります。食物は栄養だけの目的でとられるものではなく、また栄養は食物だけで割り切れるものでもありません。皆さんは、このような食物学科の内容を4年間追究してほしいと思います。

次に学科の紹介をしておきます。
 伊勢田教授(理博)は、栄養化学担任で主として植物成分の研究をし、アク成分や、コレステロールの生合成等についても研究をされています。

木下教授は調理科学及び調理担任で、味覚の科学的研究をされています。

友田教授(医博)は生理学部門担任で、カルシウム代謝が専門です。

太田原教授(医博)は前熊本県衛生研究所所長で、豊富な細菌学的研究成果があり、衛生学部門の担任です。

林助教授はアミノ酸インバランスについて精力的に追求をされています。

石本助教授(農博)は食品化学担任で、アミノ酸及びタンパク質の改修についての研究をされています。

東矢講師は応用微生物学担任で、食品に利用される微生物とその応用製品の研究をされています。

太田講師は食品加工担任で植物の成分について研究をされています。

終りに連絡事項を一つ。

本年11月4日5日の2日間、熊本市で日本栄養改善学会が開催されますので、出席して学会活動になじまれることを希望します。

できれば学科内でも、化学的と医学的と二つのゼミ

ナールを作り、学生の皆さんと講義だけでない、学問の途を作って行きたいと考えています。

みのり豊かな教養学科時代

教養部主任 柿村 峻

新入学生諸君は永い間の受験勉強時代を離れ、陽春とともに新しい大学生活にはいられることになった諸君はおのおの国文、英文、家政、食物と専門学科を志して入学されたのであるが、当面これらと関係のうすいと思われる一般教育学科に接することが多くなるのである。いまかりにこれを教養学科時代とよぶことにしよう。時代というと、大げさであるが、必ずしもそうではあるまい。思うに、この二年間は、過去のきゆうくつな受験勉強を離れ、しかもまだ卒業論文作製とか就職問題とか頭のいたくなるようなことが迫っていない自由な時間で、長い人生にまたとない青春を謳歌し得る貴重な二年であるので、あえて時代といったのである。さて、この時代をみのり豊かなものにするためには、諸君はまず自立的でなければならず、主体性を確立しなければならない。もう他律的な受験を考える必要はない。眼を大きくひらき自分自身の人間の確立のため、学問に対する態度を一新すべきである。われわれが学に志すのは、われわれをとりかこむ世界をわれを通じて知的に把握するためである。それには自発的な思索の生活にはいらなければならない。専門的技術は、そこから発生するのではあるまいか。一般教育諸学科は、専門の学科と縁遠いと嘆く必要はない。何となれば、学問は便宜上わかれているが対象とする世界は一体であるからである。そして青春を謳歌することは諸君の柔軟な頭脳で思索することである。学科はその補助にすぎない。一步退いてこういうめんどうなことをいわずとも、比較的時間のよゆうのあるこの時代に多くの古典、書物に進んで親み、外国語をマスターすることも、みのり豊かな生活をする事になるのではないか。またこの思索の時代に、ともに思索する終生の心の友を得ることもできよう。まことに可能性の時代である。こういう面に自発的努力をするならば、一般教養学科時代は、必ずしも単調なリズムのぬけた時代ではなく、みのり豊かな黄金時代となるに違いない。またそうされることを切に望むのである。リズムは諸君自身がつけなければならない。大学はその手だすけをするのである。

教務課だより

○ 昭和45年度卒業生

3月3日現在の昭和45年度卒業生は、次のとおりである。

Table with 6 columns: 学科名, 家政学科, 食物学科, 国文学科, 英文学科, 計, 備考. Row 1: 卒業生数, 60名, 58名, 55名, 47名, 220名.

昭和24年度創立以来の熊本女子大学卒業生の累計は2948名となった。

○ 昭和46年度入学試験状況

学科別入学志願者、受験者数の状況は、次のとおりである。

Table with 6 columns: 学科別, 家政学科, 食物学科, 国文学科, 英文学科, 計, 備考. Rows: 入学志願者数, 欠席者数, 受験者数.

○ 昭和46年度願書受付状況

去る2月1日(月曜日)から2月15日(月曜日)に至るまでの間昭和46年度入学願書の受付を行なったが入学志願者は、947名であった。

この志願者数は、昨年の841名に比較し106名増加し、一昨年の913名に比較しても34名増加した結果となった。

出身高校の府県別状況をみると次のような状態であった。

熊本県内が551名、県外が396名であり、県外の府県別をみると、福岡県139名で最も多く、次いで大分県62名、佐賀県47名、鹿児島県43名、宮崎県38名、長崎県26名、山口県26名、その他25名であった。

この県内、県外別の状況を昨年と比較してみると県内が55名増、県外が51名増えた結果であった。

競争率は、家政学科5.1倍、食物学科5.2名倍、国文学科5.0倍、英文学科5.3倍であり、平均競争率は5.26倍と昨年(4.67倍)を大きく上回った。

○ 昭和46年度前期授業歴

- 4月1日 学年ならびに前期始め
4月9日 新入生オリエンテーション
4月10日 入学式
4月14日 前期授業開始
5月2日 開学記念日
7月11日 } 夏期休業
9月12日 }

9月13日 夏期休業あけ授業開始

10月4日 } 前期定期試験
10月9日 }

一年次のみなさんへ

新入生の皆さんご入学おめでとう。

本年度の卒業生220名は3月3日大きく羽ばたき晴れて学門を後にして行きました。就職希望者170名が教職員や公務員ステューデンス銀行にいろいろな会社に就職しました。皆さんのうち卒業のあかつき就職希望者に対して愚言を提する。皆さんは今後全力を傾けて勉学にはげむわけですが大学で習得する就職に対する知識は、きわめて基本的なものであり将来能力を伸ばすための基礎知識にすぎません。本当に自分の力を伸ばすためには実社会において、すべての事に遭遇し一つ一つをやり遂げると共に経験を重ねることです。現実に能力を伸ばすことは職場において最大限に自分の能力を発揮し努力することではないでしょうか、同時に企業の大小でなく自分自身に合った職場で創意を織り込み努力の出来る職場こそ人生、生活に通ずる職場といえるのではないのでしょうか。わたしは女性だからせめて結婚するまで二三年といった「こしかけ」的な考がえで働かれては企業側(雇主)は頗る迷惑であろう。入社一年目は会社として経営上について社員にいろいろな問題点について研修会等を始めとして社の業績を、あげんがための社員に対する全く投資期間である。入社後三年間働いて退職したとして3-1=2と計数には+2と答は出るが会社にいわすれば業績は一年間だと答えるでしょう。それでは就職後何年働けばよいか女性として永久就職(結婚)問題をどう考えているかと反論するだろう。であるから入社第一歩から同僚は勿論、上役台からも可愛がられる社員になり「陰ひなた」なく努力すれば同僚から上役にと評判もよくなりこの人ならばと皆から親しまれる女性になれば結婚問題も自ら飛び込んで来るでしょう。一口に言えば女性として、だからでも気安く話し掛けられる人に成ることです。いかなる理由にせよ退職後に在職期間を振り返って私は、やったんだ、と心に恥じないように毎日を大切にすることで学生時代は自己中心に右左と自由に走り巡り卒業証書を手にしたら社会人として恥じない女性になればよいと思っていますとすれば大間違いである。

3月16日17日の入学試験を実施3月26日の合格発表の日、00番自分の名前を、見つけた時に「ア、あった」大声で叫んだでしょう。そのとたん目頭が、じ

ーん、と熱くなったことを思い出して下さい。これから皆さんは学生としての本分を忘れてはならない。諸君は大学で授業を受ける権利がある其の権利を自から私事のため放きするようなことがあってはならない。高校入学から卒業まで進学コースを真しぐらに走りつづけた三年間、大学入学してこゝで気を緩めるものがないようにしなくては、ならない。高校時代と異なり大学は時間があり余るので、いきおい学問以外の横道にそれがちである。常に勉学に努力する者と怠ける者との差は四年間では相当大きく響くことは明らかです。諸君は先づ大学の雰囲気になれること、いかにすれば基礎造りが出来るか、どうして自立するかを考え一日一日の積み重ねることが肝要ではなからうか、

補導厚生課長 上松 幸一

退官の御挨拶

野口 サキ

私は来る3月末日で本学を退官致しますので、退官の御挨拶を申し上げます。

私がこちらに御世話になりましたのは、本学の前身の女専が開校致しました一月ばかり前の昭和24年の4月でございました。22年に誕生したばかりの女専が24年には目出度く大学に昇格致しましたが、女専赴任以来のこの25年間は、私にとりましてまことに爽りの多い年月でございました。それは女専にまいるなり大学昇格運動に真剣に取り組ましましたし、大学になってからは家政学の研究に真剣に取り組む、かなりの成果を挙げることができたからでございます。

本学は文・家政学科がありますから、家政学部には籍をおくものは、家政学について一応の理解が必要であります。特に家政学(原論)の講義をもつ私には必要であります。私は学問の基礎がないのでこの研究ができるか不安でしたが、家政学を学問として成立させることの極めて重要であることを思い、これに取り組む決心を致しました。この決心は私の一生を大層幸せにしたように思います。

それに大学の非常な御協力がありましたので、昭和27年には本学の家政学の構想が大体でき、この年の家政学会総会で発表して学会における家政学構想の第一声となり、38年の総会時のシンポジウムでは本学の家政学の構想に対して大熊信行先生の絶賛があり、本学は家政学原論研究の大学として、その度毎に参会者一同に強い印象を与え、現在では熊本女大といえれば家政学原論研究の大学、家政学原論研究の大学といえれば熊

本女大といわれるまでに、家政学原論研究の大学として確固たる位置を占めることになりました。

私は本学退官後も相変わらず学会活動や著述活動で家政学の研究をつづけてまいりたいと思っています。どうか後につづく本学の家政学の研究が、ますます家政学の振興に寄与するように希望します。

終りに皆様の御幸福と熊本女子大学の御発展を祈念して、御挨拶を終えることに致します。

人事異動

庶務課

Table with 4 columns: 職階, 氏名, 退任日, 事由. Rows: 退職者 (教授 野口 サキ, 助手 村山千賀子, 教務職員 永田 暁子, 用務員 村上キミ子), 新任者 (助教授 大坂巳年子, 助手 中島美恵子, 渡辺 洋子), 昇任者 (助手 植田 良子, 岩本 麗子, 杉本 俱子).

カウンセラー

本学々生の身心の健康保持について次の三先生がカウンセラーとして必要の都度、相談に応じています。

- 原田益雄教授
友田 勲教授
池田勝昭講師

